



Title	ポルトガル語教材について その1 : 1~2年購読, 文化概論
Author(s)	有水, 博
Citation	大阪外国語大学論集. 1990, 1, p. 95-117
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/79458
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ポルトガル語教材について その1

(1～2年講読, 文化概論)

有 水 博

Uma escolha de materiais didáticos para o ensino de português.

Hiroshi ARIMIZU

Bastante impressionado pelo lema de que “o factor decisivo para tirar maior proveito no ensino de uma língua estrangeira, reside não na melhor qualificação do professor nem do aluno, mas sim na seleção do material didático,” o escritor deste ensaio tem concentrado o seu esforço, nestes últimos 9 anos, na escolha de material do ensino da língua portuguesa. Utilizando, em cada ano, materiais de géneros distintos, o escritor procura avaliar a adequação de cada texto, através de enquetes feitas com alunos e resultados das provas.

Conclusão; Leitura para os alunos do primeiro ano: extraído de livros didáticos do ensino primário, principalmente os de disciplina de “estudos sociais e ciências. 2º ano: leitura de contos e crônicas contemporâneos intercalados com livros didáticos de história do Brasil e de Portugal, etc.

ま え が き

1982年学報第59号で、筆者は「外国語教師一年目の試み」と題し、如何にして学生のボキャブラリーを増やすを目的として、1981年に行った二・三の試みについて報告した（実社会の側から新卒の学生を見るとボキャブラリーの不足、あるいはパラフレイズする能力の不足が目立ち、これは主として学生の読書量が決定的に不足しているためと筆者は見なし、ボキャブラリー・テストを前後に置いた夏休み新聞記事の要約、小説のグループ別課外輪読等を行った）。

この試みは、ポ・和辞書のボキャブラリーが少ないこともあり、ポ語の場合3年生以降は、どう

してもポ〜ポ辞典を使う必要があるので、2年生の終りまでに、4〜5千のボキャブラリーを蓄えることを目標とせざるを得ないためでもある。

また、これを報告した目的は、諸先生方の経験やアドバイスを伺いためであったが、返ってきたのは、「自動車学校風の外国語教育」という冷ややかな批判であった。

以来、授業改善についての資料整理は、独善的にやる以外にないかと思っていたところ、1985年7月、第5回外国語教授法研究会という学内の先生方十数名の集まりに招かれ、外国語教授法の改善に真剣に取り組んでおられる先生方の活動を知る機会を得た。同研究会は、同年4月に学内の外国語教員全員を対象に、教授法を尋ねるアンケートを実施していたが、授業中の教師と生徒間の相互干渉 (interaction analysis)、コミュニケーション・アプローチ (COCT) 等を含めた教授法の改善策を探っているようであった。

当時、サンパウロ大学のコミュニケーション・芸術学部より招いていた当学科の客員教授の授業をのぞくと、教師を中心に周囲に馬蹄形に学生の机を並べ、教師と学生間に親しみのある両方向のコミュニケーションが行なわれているようで、外国人教師の会話の授業（ポ語で、こんな時はどういふか式の機能中心のアプローチ）と、日本人教師の講読の授業（文法・訳読方式といふテキスト中心の構造的アプローチ）とは性格が違ふとはいいながら、筆者も昔ながらの授業法を、少しでも改善しなければなるまいと常日頃考えていた矢先でもあり、大いに刺激を受け、元気付けられた。

ただ、授業法の改善が、もし授業時間を分単位で、マトリックスに区切り、教師と学生間の相互干渉を記録・分析し、ビデオに撮ったり、あるいは最近始まった class room research というのか、授業中の学生間の私語まで録音できるブラック・ボックスを設置する所まで行きつくとなると、筆者などは、こわいもの見たさの好奇心はあるものの、ついて行けない気もする。

教師と学生間の両方向のコミュニケーションというのも、「云うは易く、行ふは難し」なので、当分の間筆者としては、極く常識的に、学生が打ちとけた気分で授業に臨めるよう、授業開始直後の2〜3分間は雑談し、授業中1回位は冗談をいふよう努めたり、訳読を当てた学生には、いつも学生の反応を引き出すため、名前を呼びかけてから、こちらから逆に学生の訳について質問することになっている。また、最近、恥をかくことを極度に怖れる学生が増えたので、誤訳・珍訳をした場合自尊心を傷付けないように、なるべくあっさりと、「これは、現地の生活体験がないと判らないでしょうね」とか、辞書を綿密にひいていない場合は「ちょっと手抜きだな」程度にとどめている。ただ筆者の学生時代は、クラス全員が男子だったためか、学生の珍訳が判明すると皆、遠慮なしにドッと笑い、後で考えると、堂々と珍訳した同級生程、その後進歩している。やはり、幼児が自然に母国語を修得して行く際、間違いを気にせず、どんどん話す段階→正しい表現に修正して行く段階→適切・巧みな表現を見つける段階と三つの段階を経るといわれるが、最初の段階を通らず二つ目、三つ目の段階に進むのは無理があると思う。今の学生は、当てられて訳して行って、判らない部分になると、恥をかくまいと、黙りこくり、教師が察してその部分を訳すのを待って、その後続ける。「……の部分判りません」ともいわない者が多い。筆者は一度、何人かそういう学

生が続いたので「恥をそんなにかきたくないなら、新しい外国語を習いたいなどと思うな!」と、おこったことがある。

1. 教材の選定

1.1. 教材の重要性

以前、開発途上国の教育普及計画に対する政府の技術協力プロジェクトの参考にするため、ユネスコの幾つかの報告書を読んだことがあるが、その中に「教育効果を上げる上で一番重要なことは、良い先生でも、良い生徒でもなく、良い教材である」というセリフがあったのが妙に頭にこびりついてしまった。良い先生になれる自信がない筆者にとっては、良い教材を選ぶことに努力すれば、なんとかするという救いの言葉にみえたためであろう。円熟した世代の先生方の中には、教え子の資質を自慢するあまり「ワシがどんな教材を選び、どんな教え方をしても、できる奴は放っといてもできるようになる」という人もいるが、仲々筆者はそこまで達感できないのと、ひょっとしてもっと適切な教材を使っていたら、平均的な成績だった学生が、もっと伸びたかも知れないと思ってしまう(9年間、11の学年を教えた感想は、放っといてもできる学生3割、水際につれて行っても水を飲む気のない者2割、残りの中間の5割の学生の水準を上げることが教育目標というところか)。

1.2. 教材選定の基準

ポルトガル語の場合、日本で出版された専攻の学生向のテキストは、わずか2～3しかないので、とりあえず次の基準で教材を選び、試行錯誤で実際に使ってみて、その結果を〈学生のアンケート〉と〈試験の点数〉から評価し、教材選定の一定の方向を出して行くことにした。

i) 試行錯誤である以上、原則として毎年異なった教材を使い、なるべく広い範囲から教材を選ぶことにした。これは異なる教材を使うことにより、教える側にも一種の緊張感が保て、マンネリ化しないと考えたためでもある。

ii) 教材を、内容重視型か、言語材料重視型かに分けるのが、一般的のようであるが、文法・文型を重視し、少ない重要語だけを使う言語材料型は、応々にして内容が面白くないので、基本的には、内容重視型とし、従って語いも早い段階から相当数導入し、文法・文型の説明は補足的に行うこととした。

1.3. 教材選定の対象

前期1・2年生向の教材としては、ブラジル又はポルトガルの教科書を中心として教材を選ぶ。1年生には初等教育の、2年生には中等教育の教科書を選定の対象とする。日本で外国語としてポ語を学ぶための教材と、現地で母国語を教えるための教材とは、その置かれた言語環境が全く異な

るとはいえ、やはり教科書は現代の標準的な明快な言語で書かれていることと、長年の工夫・改良で、時間の配分等教材としてうまくできていると思う。特に最近ブラジルやポルトガルの教科書は、無償配布の日本の教科書以上に、写真やイラスト、マンガ等も多く使い視角化されており、また色々な教科書を比較対照してみると、案外各教科書により個性を持っていることに気付く（本学にもカラー・コピー機を据えつけてほしい。また、教官がすべて教材をコピーしなければならないのは、なんとかならないか）。

1.3.1. <1年生向>

初等教育の教科書は、大学生の教材としては、内容が幼稚過ぎるものが多いので、その中で、なるべく大学生の関心を引くような内容のものを選ぶ（小学校の教科書は、各学年で繰り返し発展的に学ぶ共通テーマがあるので、1年生の後半には、小学校高学年の教科書のものを選ぶ。もっとも学生には、新しい外国語を習うには、幼児性というか、特に素直さが必要だとはいつてあるが）。

日常生活で使用頻度の高い普通名詞を多く含むものとして国語（ポルトガル語）の教科書よりも、社会科・理科の教科書を中心とする。但し、ポ語の音韻の美しさ、リズムを体感させるため、表現の易しい詩、歌を挿入する。

1.3.2 <2年生向>

(イ) 1年生向の教材が、小学校の社会科・理科の教科書を中心にするのに対し、2年生には中学校の国語（ポ語）、歴史の教科書を中心にする。一年間のポ語学習で、国語の教科書を理解する基礎もできるし、歴史の教科書は相手国の背景を理解すると同時に、叙述が客観的であり且単調にならないよう工夫された文体なので、卒論を書く時等の参考になるためである。

(ロ) 中等教育の教科書からの抜すいに加えて、現地で母国語を教えるための教科書が、応々にして扱わない外国人にとっては珍しい風俗・習慣、年中行事、メンタリティー、時事的な問題を扱うため：

i) 新聞・雑誌の *crônica* のコラム（時の話題、世相風刺、歳時記風のエッセイ）

ii) 雑誌の特集記事、からも教材を選ぶ。

(ハ) 平易な表現で、ストーリー性のある面白い現代小説、短い探偵小説（但し、ブラジル、ポルトガル共に探偵小説のジャンルは、未発達で、殆んど翻訳物しかない）。

あるいは、同じ語科の他の先生が、その年度に文学作品を取り上げない場合、ポルトガル、ブラジルの文学作品アンソロジーの中から取り付き易いものを選ぶ。

(ニ) 夏休みの宿題として、ブラジルの新聞の一日分を各人に与え、なるべく全ページに目を通させ、その中から興味を引いた10の記事を選ばせ、「何時、どこで、誰れが、何をしたか、何のために、如何にして」を書き出し、提出させる。

(ホ) 2年生向に、筆者は、和文ボ訳の授業も担当しているが、教材の選択基準等、上記の講読とは異なるので、別稿で扱うこととしたい。というのも和文ボ訳は、日本、日本人のことを、ブルジル人、ポルトガル人に知らせるためのものと筆者は理解しているからである（3～4年生向のポ語自

由作文, ポ語による卒論作成準備のためのミニ・レポート作成指導は, 外国人教員が担当している)。

2. 教材の具体例

2.1. ポルトガル・ブラジル文化概論

例えば, あるパラグラフを読んで意味が判るということは, 個々のセンテンスの和訳を足しただけでは不十分で, 文面に表れないすき間を, それ以前に得た知識で埋めながら各センテンスの相互関係を組み立てることによって初めて理解できると一般にいわれている。つまり文面に表れるのは, 氷山の一角で, 言語知識を超えて, 水面下にある同国人間では既知の共通の知識・約束事, いわば文化についての相応の知識を持たないと, 表面的な意味さえ判らないことがある。

従って, ポルトガル・ブラジル文化概論は, 日本語で行なう1年生向の講義で, 語学の実習とはいえないが, ポルトガル語理解の不可欠な基礎となるべき科目であろう。

ただこの授業で何を教えるか, また筆者の極めて限られた能力で何が教えられるか, 毎年悪戦・苦闘しているだけの様な気がする。言語の理解にてっとり早く役立ちそうな民族文化の比較(相手国と自国の同質性と異質性を把握する), 例えば神話・伝説から始まって, 地名・人名の命名法, 年中行事, 俗信, 諺, あるいは呼称, 男女差, 更にはレトリックの異同等を集中的に知識として与えれば, 効果が上るかも知れない。

ただ, このやり方は, 教える側によほど深い知識がないと, 断片的・表面的に流れる危険性が大きいと思う。従って, この面に関しては, 1.3.2.(iv)のi), ii)の2年生向の講読の授業の中で, *crônica* 等を教材として使う時, その都度, 触れることにした。

他方, 筆者が, かつてポルトガル語学科の学生時代受けた昔からのいわゆる事情講義(中身は, 相手国の地理と歴史の基礎知識)だけでは, この類の日本語の本が増えて行くにつれ, 存在理由が薄れて行くことになる。

筆者は, 本学に来て1年後, 本講義を担当していた非常勤講師の方が辞められたので, 2~3ヶ月の準備期間で講義を始めねばならなかったが, その際, まず参考にしたのは, (財)日本文化研究所篇「日本文化提要」1977年英語版“Guides to Japanese Culture”であった。この本はKBCの「日本研究のための標準選定図書目録」を参考にしつつ, 120名の専門家から, 日本を理解するための必読書を各人3冊づつ推せんしてもらい, その中から45冊の本を選び, (1)自然と人間, (2)日本語, (3)信仰と生活, (4)意識と思想, (5)人間関係, (6)文学, (7)伝記, (8)歴史, (9)芸術・芸能, (10)日本人が見た世界, に分類し, それぞれの著書の要点を2~3頁で解説したものであった。

ポルトガル, ブラジルにこれと類似した本が無いか探したが, ブラジルの Nelson Werneck Sodré 著“O que se deve ler para conhecer o Brasil (ブラジルを知るために何を読むべきか)” *civilização Brasileira* 発行, 1976年, Rio. しか見当らなかった。この本は, ブラジルの歴史的発展を30章, ブラジル文化等を9章に分け, それぞれの章についてマルキストの著者の独特な着眼点と

もいべき考察が2～3頁記述され、その後に各章十数点の主要参考図書（それぞれ2～3行の解題あり）と十点足らずの準参考図書名が列挙されており、著者の博覧強記には圧倒されるが、列挙された著書の内容紹介までにはなっていないので、文化概論の講義の題材には、使えなかった。

結局のところ時間切れで、

i) 筆者が、この30年位の間に読んだ主としてポルトガル・ブラジルの風土、地誌、歴史、国民性等に関するポルトガル語で書かれた著書、論文のゴッタ煮を、筆者なりに整理し、例えば歴史でも、個々の史実の解説よりは、各授業時間毎に、ひとつのテーマに沿って、なるべく各時代の特色を構造的に解説しようと試みた。例えば「ポルトガルの国家形成の特色——封建制の未発達と早熟な近代性」、「ポルトガルが発見航海時代をリードできた要因——海外発展に対する国民各層の合意と技術革新」とか、「奴隷制砂糖プランテーションの社会——Gilberto Freyre の混血雑種文化形成についての主張」、「金の時代の社会——Werneck Sodré の国民文化形成についての主張」、等々である。従って地理・歴史の基礎的事実の暗記はやめ、期末試験では大きなテーマ7題の中から5題を選ばせ5～10行で解説させる方式にし、試験中どんな参考資料を見ても良いことにした。この講義が1年生の参考になるとすれば、講義内容がすべてポ語で書かれた資料に基づいており、日本語の資料は使っていないこと位であろうか。また、マンネリ化を避けるため、毎年講義の内容の1/3か1/4を新しい内容に入れ換えてきた。

ii) 1982年と1988年には、前記i)のやり方を、まったく変え、ブラジル地理統計院 Fundação Instituto Brasileiro de Geografia e Estatística-IBGE の「ブラジル各地の風物」“tipos e aspectos do Brasil” 1975年版（各テーマに1頁大のペン画がついている）の中から、ブラジルの5つの地方毎に最も代表的と思われる風物を選び、ペン画のページのコピーを、学生に配布し、あらかじめ各人1テーマづつ割り当て、毎回3人づつ発表させ、それに続けて筆者が、補足・解説した。1982年に選んだ42のテーマ（1988年は30）のうち、学生が日本語の資料で調べられたものは、9つであった。例えば、アマゾン地方を例にとると Gaiolas e Vaticanos（アマゾン河の客船）、Pesca do Pirarucu（世界最大の淡水魚ピラクル漁）、O Juteiro（ジュート麻栽培者、ジュート麻は日本人が導入）、Seringueiros（ゴム採取人）、Caboclo amazônico（アマゾン地方の貧農）、A Rodovia Belém-Brasília（ベレーン～ブラジリア国道、1960年開通）のように、いわばブラジルの地誌を中心とし、各地方の歴史的背景を解説する講義をした。アマゾン地方については、筆者の4年間の現地滞在の経験も含めて話したが、授業中の態度、答案から見ると、ブラジルの地誌について学生はあまり関心を持たないようで、1/3位は居眠りしているか、おしゃべりしており、熱心に聞いているのは7～8名位であろうか。

2.2. 一年生講読

筆者は、1981年、1982年、1986年、1987年前半と計3年半、この授業をもっただけであるが、入学後夏休みまでの3ヶ月位は、まだ文字の読み方もおぼつかない、文法の基礎知識もない新入生に、

講読の授業をするのは難かしい。また、文化概論を除いて週6コマ（文法2コマ、講読2コマ、外国人教師会話1コマ、L.L. 1コマ）を、別々の教員（文法のみ同一人）が別々のテキストを使って教えているので、重複もあり、進展が遅いうらみがある（但し、新しい外国語の習い初めは、重複・繰返しが必要であり、またそれぞれ言語に対する姿勢が異なる当学科の全教員が、異なった角度から1年生に新しい外国語を教えるのは、十分意義あることと我々は考えている）。

ポルトガル語は、ロマンス語系の言語のひとつとして、英語より、はるかに文字の読み方に規則性がある（幾通りも読み方のあるのは、xの文字のみ。但し、音韻学的に厳密に言えば、ポ本国の母音は、14～15あるという。）ので、筆者の購読の授業は、9～10回の授業で文字の読み方を終え（各項、10位の単語と4～5語の短い文章を、ブラジル人の先生に読んでもらったテープを、まず2回聞かせ、当方から和訳を説明した後、全員でテープを真似て2回位斎読させた上、一人づつ当てて読ませる。毎時間クラス全員を当てるようにした）、夏休み前から既に小学校の教科書からとった日常生活に関する短い文章の訳読を始めた。他の教師が行う文法の授業等の理解を容易にするためにも、なるべく早くから数多くの簡単な文章に触れさせることが必要と考えたためでもある。

1年生の講読に使った教材は、次のとおりである。

2.2.1. 1981年（最初の年なので、教材を準備する間なし）。

i) 文字の読み方（筆者作成）

—鼻母音 ão, õe, ãe. —ca, co, cu と ce, ci の *abrandamento* 現象。—ça, ço, çu. —ga, go, gu と ge, gi の *abrandamento*. —gue, gui と güe, güi, gua, guo. —que, qui, qüe, qüi, qua, quo. —語首の h と ch, nh, lh. —母音に挟まれた s と ss, 語尾の z. —冠詞と名詞のリエゾン。—x の 5 種の読み方。

ii) AJELB 発行、対訳「今日のブラジル O Brasil de hoje」

上記文字の読み方（10回の授業）の後、ブラジル紹介の対訳の地理と歴史の部分、教材として使い、当初は、学生には当てて音読させるだけで、当方より冠詞、名詞、形容詞の男性・女性、単数・複数、助動詞、動詞の原形等、変化する品詞の辞書に出ている形を、実例に基づいて説明、ポ語の原文がどうして対訳の日本語になるのかを解説する授業を8回位行った。次いで学生に当てて音読させた後、当方より逆に学生に動詞の原形、法、時制等を質問する形の授業（9回）を行った。

〈学生のアンケート〉

教材について、無記名によるアンケートを行った。結果は次の通り。

表現	非常に難しい	4	内容	非常に興味を持った	0
	かなり難しい	7		かなり興味を持った	5
	適 当	4		まあまあ興味を持った	10
	易しい	1		関心なし	1

以上、旧制の高等学校の第二外国語風に、初めてその外国語を学ぶ学生に、いきなり対訳を使って実物をぶっつけるやり方は、この教材の内容があまり面白くない（但し必要な知識）割には、表現が難しかったようで、教材としては、あまり適当ではなかったようである。

2.2.2. 1982年

i) ポルトガルの小学校1年の教科書

Maria Isabela Loureiro 著 “Pintainha”, Didática Editora, Lisboa 発行

と、ブラジルの小学校1年の教科書

Branca Alves de Lima 著 Branca Alves de Lima 著 “Caminho Suave”, Ed. “Caminho Suave”
lda. São Paulo 発行

より前記2.2.1.のi)と同様の方式の文字の読み方の課(単語及び4～5語の短文。絵, イラスト付き)を切りはり, フォトコピーし, 教材とした。

ii) 7月, 9月, 10月は, ブラジルの小学校3年用の社会科・理科教科書

Deborah Pádua Mello Neves 著 “Estudos Sociais, Ciência” 2@ série Instituto Brasileiro de
Edições Pedagógicas, São Paulo 発行

より, 「子供の一日」, 「買物」, 「交通」, 「地形」, 「四季」, 「祝日」, 「植物」, 「動物」, 「食べ物」, 「私の家庭」(各課イラスト付き)を教材としてコピー。

iii) 11月以降, ブラジルの小学校6年生向ブラジルの歴史の教科書

Wanda Jaú Pimentel 著 “História do Brasil 5@ série” Instituto Brasileiro de Edições
Pedagógicas, São Paulo 発行

より, 「ブラジルの発見」, 「ヨーロッパ人とインディオ」, 「開拓入植」, 「砂糖経済」, 「奴隷貿易」, 「オランダ人の侵略」, 「沿岸地帯の経済・社会」(各課絵入り)をコピーして教材とした。

以上, 前年度の大人向けのポ・和対訳をいきなりぶつつけるやり方とは逆に, イラスト付きの易しい小学校の教科書から教材を選択するやり方についての学生の反応は:

〈アンケート〉

i) 及び ii) の日常生活を題材とした教材

内容	取り付き易い	16	分量	多過ぎる	2
	単純過ぎる	2		適 当	9
	その他	2		もっと多くても良い	9

iii) のブラジル史教科書

表現	難し過ぎる	6	内容	面白い	6
	適 当	14		まあまあ	13
	易し過ぎる	0		関心なし	0
		ブラジル史の教材	有益	13	
		物語り, おとぎ話の方が良い	5		
		その他(歴史の教材が長く続くと, あきるので, 色々取りまぜてほしい)	2		

〈テストの結果〉

i) 及び ii)

最高 100点 (4人)

最低 56

平均 95.2

iii)

最高 98点

最低 40

平均 87.3

i) 及び ii) から, iii) のブラジル史の教材に移った(11月)際, 文章が急に難かしくなったという意見があった外は, 一応教材として適当という結果が出たと思う。但し, 教材としてブラジル史より, おとぎ話・物語りの方が良いという学生が1/4いる点を考慮する必要がある。

2.2.3. 1986年及び1987年前半

(1983, 84, 85年の3年間は, 1年生の講読の授業を担当しなかった。1987年は, 同僚の中国出張中の代理で前半のみ)

1982年の授業の経験に基づき, ブラジル及びポルトガルの17冊の小学校教科書(主として社会科・理科)の内容を, 筆者が取捨選択し, 一冊(163頁)に濃縮, イラストと易しい表現の詩も間に入れて24課に分け, 1984年の本学の視聴覚委員会の教材作成費の予算で印刷して頂いた。Português Moderno através de extratos de livros didáticos 1984(教科書からの抜粋による現代ポルトガル語)筆者が編集したこの教科書を使った結果は, 次のとおりである。

〈アンケート, 1986年〉

表 現 (文章, イラスト)	面白かった	20	内 容 (教材として)	適 当	18
	まあまあ	5		単純過ぎてつまらなかった	0
	面白くなかった	1		社会科・理科の教科書より, おとぎ話, 物語りの方が良い	8

〈テストの結果〉

前半	最高	100点 (29人中6人)	後半	最高	100点 (15人)
	最低	86		最低	73
	平均	96.2		平均	96.3

テストの結果から見ると, この教材は易し過ぎる(但し1年生には達成感を与えるため意図的に, なるべく多くの学生に100点をやっている)と思われるが, アンケートでは, 内容が単純過ぎてつまらなかったという回答欄を設けたにもかかわらず, マルをつけた者はゼロであった。なお, このクラスは筆者が今迄の9年間で教えた中では最も平均水準が高いクラスだと思う。

但し, ここでも, おとぎ話, 物語りの方が良いという意見が1/3弱あったため, このクラスが2年に進級した翌年には, 例年の教材と異質なもの(ブラジルの探偵小説と, 現代作家ギマランイス・ローザの短篇)を使ってみることにした。

今後の課題としては, 筆者が編集した前記の教科書は, 社会科・理科を中心としたため, 学生の求める物語り性, ストーリー性に欠ける欠点があったことを改善することであろう。

筆者としては、新しい外国語の習い初めは、身のまわりの目に見える事物をポ語の単文で何というかという点からスタートした方が良いと考え、例えばイラスト付きの「小学校へ行く道の途中には坂があります。橋が見えます」式のものから、マンガ付きの各種職業の紹介「弁護士は、被告を弁護します。医者患者を処置します」式の単文を、少なくとも300位（授業にして10回位）は、ブラジル人の先生の読むテープを聞かせながら、繰り返すことが、「書いて話せる」アクティブ・ボキャブラリーの修得につながると考えた訳である。そして1年生の11月以降になって初めて「ブラジルの年中行事」、「都会の生活」、「田舎の生活」、「植物の光合成」等々の1頁位のまとまった文を取り入れた訳である。また、これだけでは即物的になり過ぎると考え、ひとつの課が終る毎に、ポ語の音韻の美しさ、リズムを体感させるため表現の易しい詩を、ひとつずつブラジル人の先生の朗読を聞かせながら、取り入れたが、学生には物語り、おとぎ話の方が良いようである。この点、日本の中学校の英語の教科書は、良くできていると遅ればせながら感じ入った次第であるが、ただこれで英語が書いて話せるようになるのかという疑問は残る。

2. 3. 二年生講読

1981年以降、筆者は毎年二年生の講読を週1回担当しているが、使った教材は、次のとおりである。

2.3.1. 1981年（最初の年）

池上岑夫編“Quinze Crônicas de Rubem Braga”，芸林書房。crônica（新聞・雑誌の時評コラム）の第一人者といわれる Rubem Braga の書いたものを15篇選び、註釈を付したもの。二年生にとっては、最初の2～3篇は難しいようであったが、4～5篇目から、訳が目立って向上した。夏休み宿題：ブラジルの新聞記事要訳。課外のグループ別小説輪読（1982年学報第59号の拙稿を参照願いたい）。

2.3.2. 1982年

i) 前半：フロリダ大学ラテン・アメリカ研究センター発行

Alfred Hower. Richard A. Preto-Rodas “Crônicas Brasileiras” University of Florida, Center of Latin American Studies

（ブラジルの代表的な crônica の作者十数名につき、それぞれ2～3篇選んだもの）の中から、次の作品を教材として選んだ：

O Pessoal (Rubem Braga 作)（宛先の住所が間違っている手紙が多いのをなげく郵便配達）。

O padeiro (idem.)（毎朝パンを配達してくるパン屋）。

O Telefone (Luis Martins)（女性の長電話）。

Cem cruzeiros a mais (Fernando Sabino)（役所の窓口のお釣りが、100クロゼイロス多いのを返却しようとした男がぶつかる官僚主義の壁）。

A mulher vestida (idem.)（鍵が外から掛けられ、閉じ込められた女性についてのヤジ馬の無責

任なデマ)。

Tempo perdido (Luis Martins) (失われた時)。

Éramos mais unidos aos domingos (Sergio Porto) (昔は、日曜日には、皆一緒だった)。

É domingo e anoiteceu (Rubem Braga) (日曜日で、夜になった)。

Férias conjugais (Paulo mendes Campos) (夫婦の休日)。

本書の編者によれば、crônica は、今日のブラジルの都市の中間層(知識階級)の生活とものの考え方を知る最良の教材の由。1 授業時間で、おおむね1 編終えるのも教材として良いと思う。

〈アンケート〉

表現	非常に難しい	4	内容	面白い	8
	かなり難しい	8		かなり面白い	3
	適 当	2		まあまあ	4
	易しい	1		関心なし	1

〈テスト〉

最高 100点 (1 人)

最低 44

平均 91.3

アンケートの結果からは、crônica は、2 年生には少し難し過ぎる(口語的表現や、現地の生活体験がないと判りにくい点あり)感があるが、内容について学生は、かなり関心を持っており、有益な教材といえよう。

ii) 後半: 夏休みのブラジルの新聞要訳の宿題の後、10月から次の教材を使った。

ポルトガル文学アンソロジー (この年に当学科で講読の授業に文学作品を取り上げる先生がいなかったもので、それを補う意味もあって、ポルトガルの工業中学校の国語教科書から、次のものを選んだ(つづり字現代化、古語註釈付)

Os Lusíadas (Canto I, est. 1-3, CantoIII, est. 20-21, Inês de Castro) (16世紀のポルトガルの叙事詩、最高の古典より8つの歌)。

Uma aventura de Fernão Mendes Pinto (Peregrinação, Os portugueses no Japão) (16世紀最大の旅行家の紀行文より種ヶ島来航の部分)。

Almeida Garrett 作 (Barca Bela, Rosa e Lírio) (ロマンティズムの代表的詩人の詩、2 篇)。

Alexandre Herculano (A dama pé-de-cabra) (ロマンティズムの怪奇短篇)。

Camilo Castelo Branco (O réu) (ロマンティズムの短篇)。

Júlio Dinis (O Herbanário) (近代化をなげく牧歌的短篇)。

Eça de queirós (Serra bendita entre as serras) (リアリズム小説の一部)。

Fernando Pessoa (D. Dinis, Filipa de Lencastre, Tocador de harpa) (シンボリズムの詩3 篇)。

Florbela Espanca (Alma perdida, Ser poeta) (感能的な女流詩人の詩4 篇)。

〈アンケート〉

表現	非常に難しい	9	内容	面白い	4
	かなり難しい	4		かなり面白い	2
	適 当	2		まあまあ	8
	易しい	0		関心なし	2

〈テスト〉

最高 100点 (18人中5人)

最低 97

平均 98.8

表現が非常に難しいが9人、かなり難しいが4人いるにしては、結果が良過ぎる感じがしていたら、某学生より、4～5人の者が、カンニングしていたとの訴えを受けた。答案を点検したところ、5名の者の答案の誤りが酷似していた。カンニングするのは、やはり教材が難し過ぎたかと反省したが、筆者のテストは、授業時間中にやった範囲内で、常に12題の中から10題選んで訳させる方式（外国語の習得に完全主義は邪魔で、8割主義で良いと、いつも学生にいつている）なので、それ程無理なテストとは思われない。「学生時代のカンニング常習者は、社会に出てからも会社の金を使い込んだりして大学の名を傷つけるだろうから、今のうち教授会にかけて、退学してもらおう」と申し渡した。

2.3.3. 1983年

i) 前半：ブラジルの小学校高学年，中学校の国語（ポ語）教科書として最も高い評価を受けている。

Dino Preti 著 “Portugues Oral e Escrito” 5, 6, 7, e 8 Companhia Editora Nacional. São Paulo
1978 年発行

の小学校 5, 6 年, 中学校 1, 2 年の教科書より次のものを選んだ。

Por causa de uma dor de dentes. (Érico Veríssimo) (ブラジル独立運動の逸話短篇)。

Brasil 2063. (Stanislau Ponte Preta) (ブラジル, 2063年, ユーモア未来 S.F.)。

O Importuno. (Carlos Drummond de Andrade) (ブラジル現代最大の詩人といわれる著者の短篇)。

Lugar reservado. (Fernando Sabino) (飛行機の空き席をめぐる crônica)。

Plebiscito. (Artur Azevedo) (短篇, 国民投票)。

〈アンケート〉

表現	難し過ぎる	2	内容	面白い	12
	適 当	19		普 通	7
	易しい	0		関心なし	0

翌年の2年生に同様の教材を使うことの可否

{	良	15
	他のものに変えた方がよい	4

〈テスト〉

最高 98点

最低 62.5

平均 86.5

以上の結果から、前年の古典を含めた文学作品の一部分のアンソロジーより、近現代の短篇から選んだものの方が、はるかに学生には取り付き易く、教材として適しているといえよう。

夏休みの宿題のブラジルの新聞記事要訳の後、この年度は、ポルトガル文学専門の濱口先生が着任されたので、前年度のような文学作品のアンソロジーはやめ、後半は次の教材を使った。

ii) 後半：ブラジルの中学生向けのブラジル歴史教科書の中で最も高い評価を受けている。

Sergio Buarque de Hollanda 編 “Estudos Sociais: História do Brasil I” Companhia Editora Nacional. São Paulo 1979 年発行

の中から次の項目を選んだ。

Os descobrimentos (発見航海, ブラジルの発見)。

Exploração e posse da Terra (土地の探検と占有)。

Desenvolvimento e economia dos primeiros tempos (初期の経済開発)。

O que devemos ao índio (インディオから受けついだもの)。

A era do ouro do Brasil (ブラジルの金の時代)。

A Era das Revoluções (叛乱の時代)。

A Família Real Portuguesa no Brasil (ポルトガル王室のブラジル移転)。

また、19世紀後半の新聞の政治マンガを編集し、解説を加えた。

Araken Tavora 著 “D. Pedro II e o seu mundo através da caricatura” Editora documentária.

Rio. 1976 年発行

(政治マンガを通じて見たドン・ペドロ皇帝の世界)の一部を使用した。

〈アンケート〉

表現 {	難し過ぎる	0	内容 {	面白い	13
	適 当	21		まあまあ	7
	易し過ぎる	1		つまらぬ	1

〈テスト〉

最高 99点

最低 44 (筆者が D をつけた学生：欠席16回)

平均 86.7

アンケートの結果から、ブラジル史の中学校の教科書から教材を選ぶのも適当と思われる。

2.3.4. 1984年

i) 前半：前年使ったブラジルの小学校高学年，中学校の国語教科書 (Dino Preti 編) が，アンケートの結果，教材として適当と思われたので，同じ教科書から次の別の課を選んだ。

O pombo enigmático (Paulo Mendes Campos) (鳩の目から見たリオの町)。

Clarissa (Érico Veríssimo) (小説少女クラリッサの中の一情景)。

詩 Jangada (Juvenal Galeno) (東北伯の漁師)。

Diploma (Carlos Drummond de Andrade) (短篇：免状)。

O Trem de Maguari (Antônio Alcântara Machado) (ベレーンの列車内の暴動)。

詩 Nel Mezzo del Cammin (Olavo Bilac) (人生の途上にて)。

A estranha passageira (Stanislaw Ponte Preta) (飛行機の中で会ったおかしな乗客)。

Vozes do retrato (Dalton Trevisan) (短篇：肖像の声)。

〈アンケート〉は実施しなかった。

〈テストの結果〉

最高 100点 (1名)

最低 26 (60点以下2名，欠席1名)

平均 85.0

夏休みの宿題のブラジルの新聞記事要訳の後

ii) 後半：ポルトガルの中学2年のポルトガル史教科書

M. Martim dos Santos. Vera Costa 共著 “História de Portugal” 1979 年発行

から，次の項目を選んで使った。このクラスは，一年生の文化概論で，ブラジル地誌中心の講義をし，ポルトガルについては5～6回の授業でしか触れられなかったのを補うため，ポルトガル史の教科書を教材としたもの。

Formação da nacionalidade (ポルトガルの国家形成)。

O Alargamento do Reino (ポ王国の拡大)。

Organização política-as Cortes (政治組織—コルテス)。

População (住民)。

Os senhorios, Concelhos rurais e urbanos (地方領主と都市及び農村自治組織)。

Comércio externo (通商)。

A crise de 1383-1385 (1383-85年間の危機，リスボン市民のろう城)。

Início da expansão (海外発展の始まり)。

Descobrimientos marítimos (発見航海)。

〈アンケート〉実施せず。

〈テスト〉

最高 97点 (1名)

最低 15 (60点未満が6人)

平均 75.8

このクラスは、年間27回の授業のうち、欠席20回の者 (テスト26点)、欠席17回の者 (51点)、欠席13回の者 (54点)、欠席8回の者 (31点) と前年度からの留年者欠席24回 (15点) 計5名に筆者はDを付ける積りであったが、他の先生のテストの結果が平均的な2名は結局Cにした。残りの3名は他の専攻の授業の単位も殆んど取れなかった。この原因については良く判らないが (教材はその前年度とさして変わらず、また、これらの者を除くとクラスの年平均点は、89.5)、5名のうち3名が運動部員で、いづれの授業も半分以上欠席しており、他の2名は意図的に留年したようで、期末試験も1回しか受けていない。どうも入学年次によって、学生の熱意に波があり、ある年に、20人のクラスで5~6人やる気がない者が集まると、かたまって安心してサボると思う。留年した運動部の諸君に対しては、「自己管理ができない者は、スポーツ・マンとして三流以下」とおどかし置いていた。

2.3.5. 1985年

i) 前半: 前年と同様、Dino Preti 編のブラジルの国語教科書から、次の課を選んだ。

Menino (Fernando Sabino) (親に口答えする生意気盛りの子供についての crônica)。

詩 Romance de Cabiúna (Ribeiro Couto) (海にアコガれる少年)。

Aladino, o novo mágico (Afonso Schmidt) (短編サーカスの魔術師)。

Remédio do céu é sempre mais barato (José Cândido de Carvalho) (人情話)。

詩 A serra do Rola-Moça (Mário de Andrade) (おせんころがし)。

また、この年は、短篇と歴史教科書を交互に教材として使うため、前記2.3.3.の Sérgio Buarque de Hollanda 編のブラジル史教科書から、

O primeiro Reinado e a Regência (第1帝政と執政時代)。

Economia brasileira (当時の経済)。

Segundo Reinado (第Ⅱ帝政)。

を選んだが、これは内容的には一年生の文化概論に続く時代のものである。

〈アンケート〉実施せず。

〈テスト〉

最高 100点 (23人中9人)

最低 67

平均 92.0

夏休みのブラジルの新聞記事要訳の後、この年は、P.B. 語学科で初めて語劇をやることになったので、濱口先生が選んだ脚本

“A Gata Borralheira.” Tavares & Tristao-Gráfica e Editora de Livros. Direção Geral de Maria Clara Machadox. Rio. 1962

(ブラジル版シンデレラ) の約半分を、9月、10月前半の授業で扱った(テストの範囲外)

ii) 後半: 前半のブラジル史教科書の続き

O Segundo Reinado (第Ⅱ帝政)。

As campanhas pela abolição da escravidão (奴隷制廃止運動)。

前記 2.3.3. ii) の Araken Távora 著「政治マンガを通じて見たドン・ペドロ皇帝の世界」の続きを教材とした。

〈アンケート〉実施せず。

〈テスト〉

最高 99点 (2名)

最低 50

平均 90.5

2.3.6. 1986年

i) 前半: 1983, 84, 85年と3年間ブラジルの国語教科書(前記 Dino Preti 編)の4冊(4学年分)の教科書の約50の課の中から、当学科の二年生に適すると思われる18の課を選んで使い、残りの課は、あまり筆者の興味を引かなかったので、1986年は、まったく新しい分野の教材を試みることにした。選んだものは、Veja, 21 de agosto de 1985. “Sem Freud nem Lênin” (1985年8月21日付雑誌ヴェージャ、特集記事“フロイトもレーニンも関係なしに”)というブラジルの今日の若者のモラル、性行動を扱った特集記事を教材にした。Veja 誌は、タイム・ライフ式のブラジルの知識階級が読む週刊誌としては、最大の発行部数(約50万)を持つ。次いで、Veja, 9 de outubro de 1985. “Alerta nas Escolas” (1985年10月9日付同誌特集記事“学校教育の赤信号”)と題するブラジルの義務教育の欠かんと扱った記事を教材にした。

一人づつ順番に当てて行くと、最初の4～5回の授業では皆四苦八苦して訳していたが、その後はクラスの1/3位の学生が、おおむね適格な訳をするようになった。二年生の教材としては、難し過ぎた感がある。

〈アンケート〉実施しようと思っていたが、時を失した。後で4～5名の学生に尋ねたところ、文章は難し過ぎたが、内容は興味深いとのこと。

〈テスト〉

最高 98点 (2人)

最低 60

平均 88

授業中の学生の訳から、もっと低い点を予想していたが、割に良い点が出たことは、かなり内容に興味を持ったといっても良いであろう。

夏休みのブラジルの新聞要訳の宿題の後、10月からは、次の教材を使った。

ii) 後半: ブラジルの小説家で、代表的な crônica の作者でもある Fernando Sabino が、

VARIG 航空の招待で、大阪に来、講演をしたので（ブラジルのエコノミストのクルザード計画についての講演とベアー）、訪ねて行き、同人の *crônica* を教材に使っている旨話したら、大変喜こび、同人が書いた最新の *crônica* 数篇を集めた非売品の小冊子にサインして贈呈してくれた。早速教材として使ったが学生には、この教材を使っているのは、世界中で君達だけだと前宣伝して使った。

Dois e dois são cinco (Fernando Sabino) (数学の苦手な著者の話)。

O hóspede do 504 (リオからの度重なるサンパウロへの出張で、ホテルに荷物を置いてすぐ仕事に出、どこのホテルにチェック・インしたか忘れて、朝までさ迷う話)。

Sob a carícia de meus dedos (計算機を使ったおかしな遊び)。

A falta que ela me faz (お手伝いさんが休んで困る話)。

更に、11月半ばより、この年の教材があまりに現実的なものばかりだったことと、当学科の他の先生方で、詩を教材に使っている人がいなかったので、ポルトガルの中学校の国語教科書から、次の詩を教材にした。

Luzes (António San Payo de Araujo in *Diário de Notícias*) (詩：信号、新聞に掲載された現代詩)。

Alma Perdida (Florbela Espanca)。

Viajar (Fernando Pessoa)。

Triste de quem vive em casa (Fernando Pessoa)。

Flores de verde pino (D. Dinis-in *Cancioneiro da Biblioteca Nacional*)。

O navio negreiro (Castro Alves) の一部。

<アンケート> 実施せず。

<テスト>

最高 99点 (17人中4人)

最低 41 (60点以下1名、欠席19回 D)

平均 89

2.3.7. 1987年

i) 前半：この年の2年生は、前記2.3.3.の一年生の時成績が良かったクラスで、筆者が一年生向に編集した絵入り教科書についてもっと物語り性のある教材を希望する者が多かったクラスである。そこでブラジルでは未発達分野の探偵小説（ブラジルの警察は犯人を推理するよりは、一番疑わしい者を拷問して犯人に仕立て上げるので、探偵小説が成立する環境がないと同書のはしがきに書いてある）“O homem que matou duas vezes”（“2回殺した男”：最も犯人と疑われやすい立場の男が、相手を殺した数時間後、死後硬直が始まってから、もう一度死体を撃って派手に逃げて故意につかまり、検死の結果死亡推定時刻から、その男は死体だったとは知らずに撃ったもので、最初に撃った真犯人は、別人という筋書がうまく行きかけて、結局失敗する話）を教材にし

た。

〈アンケート〉

表現	難し過ぎる	13	内容	面白い	10
	適 当	14		普 通	12
	易し過ぎる	0		つまらない	5

確かに、この探偵小説は、文学作品風に表現が、少しこっているのと、現地の生活感覚、土地感がないと判にくい部分もある。

ブラジルでも、英米仏の探偵小説が沢山翻訳出版されているが、やはり教材として使うのは、ポ語を学ぶだけではなく、ブラジル事情についても少しでも学ぶという観点から、ブラジルでは珍しい国産の探偵小説を、教材として選んだ訳である。

〈テスト〉

最高 100点 (28人中8人)

最低 58

平均 94

夏休みの例年の宿題は、他の先生が多量の宿題を出したとのことなので、単にブラジルの新聞を各人に1日分ずつ配るだけにとどめた。

ii) 後半：ブラジルの最も代表的な現代の作家 Guimarães Rosa の “A terceira margem do rio” (第三の河岸) という短篇を教材にした。ギマランセス・ローザは、方言・俗語を使い、哲学的というか、象徴的で難解な小説を書く作家として知られているが、この作品は同人の作品の中では判り易いのと、筆者の頭に、魚の骨のように妙にひっかかっている気になる作品なので、教材として取り上げた。良くできる子が多いクラスなので、ひとつ試してやろうという下心もあった。

〈アンケート〉

表現	難し過ぎる	23	内容	面白い	7
	適 当	3		普 通	6
	易し過ぎる	0		面白くない	10
				その他 (考えさせられる)	4

面白いと感じた者が7名、その他が4名居たので、筆者は満足した。

次いで、ブラジルの現代最高の詩人 Carlos Drummond de Andrade が逝去したので、同人の詩 “Os homens; as viagens” を取り上げ、また Guller Ferreira の詩 “Não há vagas” と、Tiago de Melo の詩 “Madrugada camponesa” も教材にした。

12月より、ブラジルの高校世界史の教科書から、A industrialização no século XIX e o novo colonialismo/a economia brasileira no século XIX (19世紀の工業化と新植民地主義, 19世紀のブラジル経済)。O período entre-guerras/as repercussões da Grande Guerra no Brasil (両大戦間, 世界大戦のブラジルに及ぼした反響) を教材にした。

<テスト>

最高 100点 (6人)

最低 68

平均 93

例年より難かしい教材を使って、この平均点なので、やはりこのクラスは優秀だと思う。

2.3.8. 1988年

ここまでの7年間、毎年2年生の講読を担当し、様々な教材を使った結果、適切な教材は、ブラジルの国語教科書 (Dino Preti 編) 又は *crônica* と、ブラジル史の教科書の組合せという平凡な結論が出かけたので、この年は、それを検証しようとした (Dino Preti の国語教科書は近・現代の短篇を集めたもので、その中には *crônica* も一部入っている)。

i) 前半: 前記 2.3.2. のフロリダ大学編さんの “*crônicas brasileiras*” より、次のものを選んだ。

(i) O pessoal (Rubem Braga)

(ii) O telefone (Luis Martins)

(iii) Cem cruzeiros a mais (Fernando Sabino)

(以上、三篇は、2.3.2. に前出)

(iv) Raconto de natividade (Helena Silveira) (クリスマス夜話: 貧農が、自分のせめて最初の赤ん坊は大地主の子のように立派な産院で生まれたいと思い、院長に自分の土地—実は借地—を買ってくれともちかけ、あたかも大金が入るかのように見せかけ産院の費用を踏み倒す、院長夫人が、その貧農の親の心意気を感じ、院長に貧農を警察につき出さないよう頼む現代版キリスト誕生の話)。

(v) Dar um jeito (Paulo Mendes Campos) (ブラジル特有の規則をかいぐり、コネを利用して“なんとか都合をつける”方法の外国人への伝授)。

(vi) Caso de recenseamento (Carlos Drummond de Andrade) (国勢調査に訪れた美しい女性調査員と、調査される独身男の、ちょうちょう・はっしのやりとり)。

<アンケート>

表現	難し過ぎる	12	内容	興味を持った	18
	適当	19		まあまあ	10
	易し過ぎる	0		面白くない	3

上記(i)から(vi)までの個別の *crônica* に対する学生の関心度をアンケート (興味を持った◎, まあまあ○, 興味なし×) したところ

(i) 郵便配達の話 ◎3, ○6, ×8。

(ii) 女性の長電話 ◎1, ○6, ×6。

(iii) ブラジルの官僚主義 ◎13, ○8, ×2。

(iv) クリスマス夜話 ◎13, ○8, ×2。

(ホ) 「なんとか都合つける」 ◎5, ○8, ×11。

(ヘ) 美しい国勢調査員 ◎15, ○9, ×4。

一番人気があったのは、(ヘ)の国勢調査員、つまり若い男女間の会話を扱ったものであったことは、うなづけるが、二番目が(ニ)のクリスマス夜話というのは、少し意外な気がした。現代の若者は、物語り性を求めているということと、意外に現代版人情話が好きだということが判った。

なお、crônica を授業で扱う際は、言葉の解説だけではなく、それに関連したブラジルの習慣、メンタリティー（例えば、「郵便配達の話」のところでは、急激な人口の都市集中で、ブラジルの大都会には田舎の人のメンタリティー、田舎へのノスタルジャーがあるとか、「ブラジルの官僚主義＝文書第一主義」のところでは、日本の官僚主義と、どう違うか、あるいは、「国勢調査員」のところでは、男・女間の会話術が、ブラジル（対面式）と日本（横並び式）では、どう違うか）等の補足説明を、必ずしている。

ii) 後半：Sérgio Buarque de Hollanda 編の前出のブラジル史教科書より、

A formação Territorial Brasileira 1580-1700 （ブラジルの領土形成）

A Era do ouro do Brasil （ブラジルの金の時代）

A Era das revoluções （叛乱の時代）

A vida no Brasil Colonial （植民地時代の人々の生活）

を教材にした。

〈アンケート〉

表現	難し過ぎる	0	内容	興味が持てた	15
	適 当	24		まあまあ	16
	易し過ぎる	3		面白くない	1

〈テスト〉

最高 100点（日本語学科3名を含め36名中4名）

最低 47（60点以下1名12回欠席D）

平均 90.5

なお、ブラジル史の教科書を教材にする際も、言葉文体の説明だけでなく、教材と関連したブラジル史の補足背景説明を毎回5～10分位は、することになっている。

この年の二年生に対しては、一年生の時の文化概論の講義も含め、ブラジル史のどの時代に最も関心を持っているかアンケートした。

- | | |
|--------------|-----|
| 1. 独立前後 | 12名 |
| 2. 砂糖の時代・奴隷制 | 11 |
| 3. 金の時代 | 11 |
| 4. ブラジルの発見当初 | 6 |
| 5. インディオ | 4 |

- | | |
|--------|---|
| 6. 帝 政 | 4 |
| 7. 現 代 | 2 |

(但し、文化概論でも、2年生の講読の授業でも、現代にはまったく触れていない。3～4年の選択科目で、筆者は現代史を講義している)。

更に、今迄2年生向に使ってきた講読の教材の種類を説明し、いわゆる純文学の作品を教材に使うことの可否をアンケートしたところ、

- | | |
|----------------------|-----|
| 純文学 <u>以外</u> のものが良い | 25名 |
| 純文学を含めても良い | 6 |

どのような種類の教材に関心があるかというアンケートに対しては、

- | | |
|-----------------|----|
| 1. crônica が面白い | 6名 |
| 2. 経済関係 | 6 |
| 3. 新聞記事 | 5 |
| 4. 日常生活 | 5 |
| 5. 雑誌の特集記事 | 4 |
| 6. 政 治 | 3 |
| 7. 社 会 | 3 |

で、この外、文化人類学、料理の本、商業文、マンガ、物語り、絵本、探偵小説、恋愛小説、大衆文化が、それぞれ1名づついた。この内、経済関係、商業文は3～4年の選択科目で取り上げているし、言語、文学、文化の三講座のうち、どれを重点的に履修するか分かれていない二年生の段階の必須科目で、取り上げる訳にはいかない。

2.3.9. 「まとめ」と今後の課題

以上のアンケートの結果を、教材の種類別に、〈表現の難易度 (非常に難しい、と難しいの合計)〉、〈学生の関心度 (非常に面白い、と面白いの合計)〉、テストの平均点で整理すると、

〈教材の種類〉	〈表現の難易度〉	〈学生の関心度〉	〈平均点〉
crônica	52.2%*	61.7%*	86.7**
国語教科書 (近・現代短篇)	9.5	63.2	87.9**
古典を含めた アンソロジー	86.7	37.5	不明
歴史教科書	0	61.9	84.5**
雑誌特集記事	(アンケート実施せず)		88
探偵小説	48.2	37.0	94
純文学作品	88.5	40.7	93

(*印は2回の平均、**印は3回の加重平均)。

表現の難易度からいうと、「純文学作品」と、「古典を含めたアンソロジー」は、二年生の教材と

しては難し過ぎるといえよう。他方、歴史教科書は易し過ぎる（外大の学生としては、易し過ぎると授業中の集中力が下がり、テストの結果は下るといえよう）と思う。

内容に関する学生の関心度は、「近・現代の短篇を中心とした小学校高学年・中学校の国語教科書」から選んだ教材が一位で、それに「歴史教科書」「crônica」が、ほぼ並んで続く。

平均点は、おしなべて満足すべきものと思う。「探偵小説」と「純文学作品」の点が良いのは、特定の年次のひとクラスだけの結果なので、性急な判断は下せまい。

今後の課題としては、

(イ) 教材に適した近・現代の短篇を、特定の教科書からだけでなく、より広い範囲から見つけ出すこと。

(ロ) これに如何にして crônica（現代文学のひとつのジャンルとして確立されつつあり、また現代のブラジルを知る最良の教材のひとつ）を組合せて行くか。というのは、crônica だけでは、物語り性を求める学生の欲求に応えられないと思うからである。

(ハ) これと平行して、「歴史教科書」も、言語、文学、文化の三講座のいずれの分野で卒論を書く場合でも、歴史は共通した基礎知識であり、論理的で平明な文章を書く際の参考にもなるので、引き続き教材とすべきものとする。ただ言語材料として、中学校の歴史教科書は易し過ぎる感もあるので、特定の歴史上のテーマを論じた平明な表現の論文を教材としたり、他方、歴史の教科書が続けて長く使うとあきるとアンケートに書いた学生もあるので、一区切り毎に（クラス全員に1回づつ当る4～5回の授業）、前記(イ)(ロ)の短篇、crônica等を挿入して行う必要があろう。

(ニ) 純文学又は古典は、3～4年生の後期で扱うべきであろう。ただ後期は、全科目が選択制になるので、履修する学生が少ない場合は、二年生の必須科目で、文学作品のアンソロジーを教材として使うことを考えねばなるまい。

(ホ) 探偵小説は、国産にとらわれず、あまり筋のこみ入っていない現代のポ語版翻訳ものを、課外の輪読の教材として多読する等の方法があろう。速読の指導は、3～4年生の段階（5千以上のボキャブラリー）から考えれば良いのではないか。

(ヘ) 夏休みの宿題のブラジルの新聞記事要訳：1987年を除いて、毎年2年生の夏休みに、ブラジルの新聞（o Jornal do Brasil, o Estado de São Paulo, Folha de São Pauloの三紙のいずれか）1日分を、各人に贈呈し、なるべく隅から隅まで目を通した上、10の記事を選んで、「何時、何処で、誰れが、何をしたか、何故、如何にして」を書かせ、提出させているが、学生のアンケートの結果は次の通りである。

〈アンケート〉

		(1981年)	(1982年)
表現	非常に難しかった	6	5
	かなり難しかった	6	7
	普通	2	4
	易しかった	0	0
内容	大いに興味を持った	2	4
	かなり興味を持った	4	4
	まあまあ	8	8
	関心なし	0	0

翌年も2年生に同様の宿題を出すことの可否

出した方がためになる	5	9
継続しても良い	6	6
他の宿題に変えるべき	3	1

新聞の宿題は、2年生の夏では難し過ぎるかも知れないが、宿題として出しても良いと答えた者が $\frac{11}{14}$ および $\frac{15}{16}$ 名いることと、筆者としては必要性があると考えるので、継続することになっている。

以上、紙数制限があるので、一年生、二年生の講読及び文化概論についてのみ報告したが、次の機会に、筆者が担当している二年生向和文・ポ訳、三～四年生向のブラジル経済資料講読、商業文、ポルトガル及びブラジル現代史講義・演習について報告したい。